

目指せ！ さいたま考古マスター

君に挑戦！ これなんだ??

第 7 回

さいたまの船編 かいせつ 後編 奈良・平安時代～

もくじ

問題	その6 丸くて真ん中に四角いあな。これなんだ？	1 ページ
	正解はお金	1 ページ
	見沼田んぼのうつりかわり	1 ページ
	なぜお金が？ -の前に見沼のまつり	3 ページ
	なぜお金が？	5 ページ
	船とのかかわり	7 ページ
	船とのわかれ、あたらしいまつり	8 ページ
問題	その7 船のむこうにあやしい木組み。これなんだ？	10 ページ
	正解は水の高さの調節のための関	10 ページ
	どうして、そしてどうやって、水の高さを調節するの？	10 ページ
	おまけのはなし 〈ひきふね〉	14 ページ
問題	その8 板と丸太が川を横断。これなんだ？	15 ページ
	正解は橋	15 ページ
	羽根倉渡しの様子	15 ページ
	歴史の中の羽根倉渡し	16 ページ
	おまけのはなし 〈ふなばし〉	17 ページ
	おまけのはなし 〈羽根倉合戦の古文書〉	18 ページ
	さらにおまけのはなし 〈太田資正の物語と船〉	20 ページ
	まだまだ続くおまけのはなし 〈見沼の船の悲劇〉	22 ページ

その6 丸くて真ん中に四角いあな。

これなんだ？

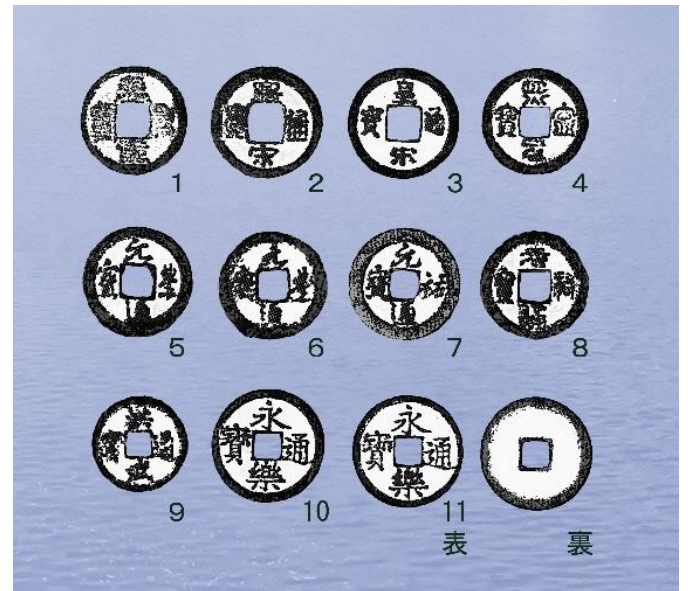
次の二つの中からえらんでね！

1. 刀の部品の「せっぱ(切羽)」

第5回に金色の「せっぱ」
がでたぞ？

2. お金

第1回に「和同開珎」がで
たよ！



ヒント 織田信長（おだのぶなが）が旗（はた）のマークにしていたものが・・・。

答 え 2. お金

解 説

●正解はお金（おかね）

これは、今から600年くらい前から1000年くらい前のお金なんだ。丸の右下に数字をつけてあるけど、10番と11番は「永楽通宝（えいらくつうほう）」、織田信長（おだのぶなが）はいくさのときに使うはたのもようにしていたお金だね。銅を主な原料としてつくられていること、それからこういう形の金属のお金のことを「銭（ぜに。音読みで「せん）」というので、銅銭（どうせん）といたりもするんだ。

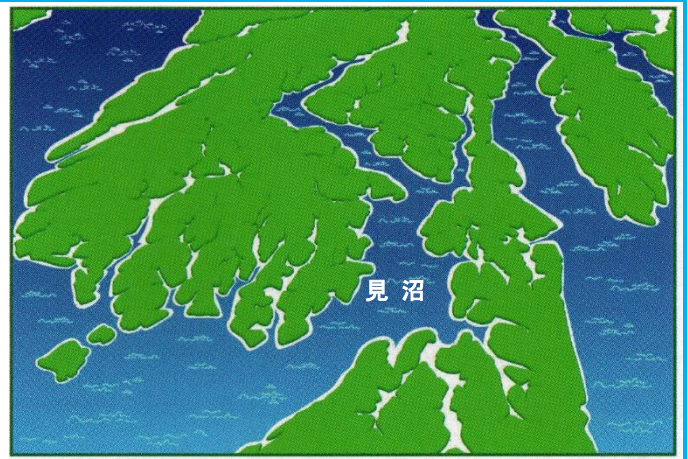
どこでみつかったお金かっていうと、緑区の四本竹遺跡（しほんだけいせき）から出土したんだよ。四本竹遺跡では、こういう銅銭が発掘調査と事前の調査で、あわせて108枚も見つかったんだよ。最後のところに、その108枚の一覧表（いちらんひょう）をのせて、問題のお金がどれかもわかるようにしておくから、あとで見てみてね。

四本竹遺跡は、第6回のかいせつの中で丸木舟が出土した遺跡の一つとして名前が出ていたんだけど、気がついたかな？丸木舟が出土したことからもわかるように、この遺跡は低地の遺跡、しかも「見沼田んぼ」のまん中にある遺跡なんだよ。

じゃあ、どうして見沼田んぼのまん中でお金がたくさんみつかったのかな？それは、見沼田んぼの長い歴史の中でのうつりかわりと深く関わっているんだ。

●見沼田んぼのうつりかわり

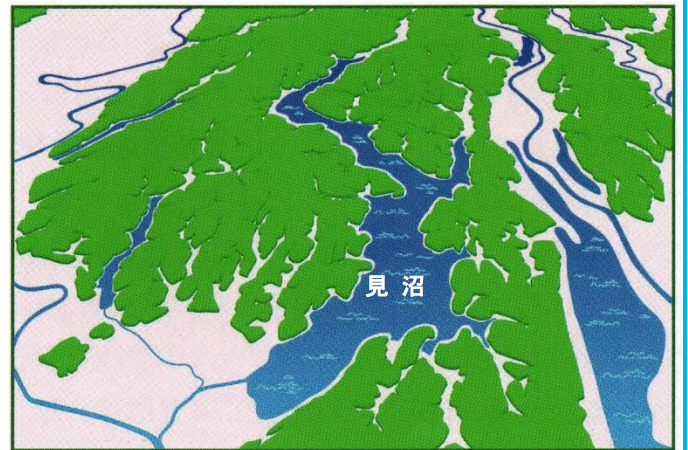
海だった時代 縄文時代が始まった頃には、見沼田んぼのあたりは、深い溪谷（けいこく）のようになっていたんだ。今から7000～8000年くらい前の縄文時代早期の末から前期のはじまりのころ、地球全体の温暖化の影響で海水がこの溪谷の奥深くまで入り込んできたんだ。見沼田んぼのあたりは、大きな入江（いりえ）というか、湾（わん）のような形になっていたんだ。四本竹遺跡の銅銭が出土した層の下の土の中からは、群生していた貝の貝殻の層やフジツボなんかが見つかっていて、実際に海の底になっていたことがわかっているんだ。



海だった時代のイメージ

※『見沼のうつりかわり』（さいたま市立浦和博物館発行）より

沼だった時代 海の底には次第に波でけずられた土砂や上流から運ばれてきた土砂がたまっていて、さらに潮流の影響などから入江の入り口のあたりに土砂がたまったりしていたんだ。そして次第に海岸が内陸から引いていくと、河川が発達してさらに土砂のたいせきが進んだんだ。見沼田んぼの入江の入り口あたりには、のちの荒川のもとになる大きな川が流れるようになって、その川のまわりにはさらに土砂がたまるようになったんだ。そうすると、入江の中の水が外に流れ出にくくなって、今度は塩水ではなくて、川や雨、湧き水などの淡水が入江の中にたまるようになったんだ。こうして海が来ていた時代には入江だったところが、沼にかわったんだ。

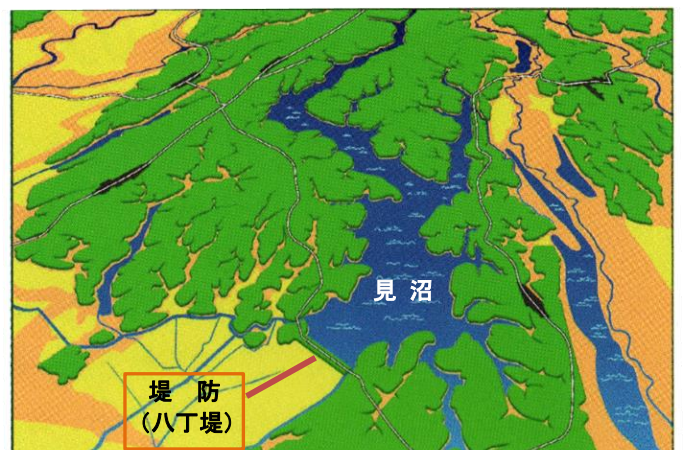


沼だった時代のイメージ

※『見沼のうつりかわり』（前掲）より

こうしてできた沼は、いつしか「見沼」って呼ばれるようになったんだよ。そして、電気も水道もない時代、豊かな水をたたえるこの見沼は、人々に豊穰（ほうじょう）をもたらすみなもととなって、やがて、時には感謝やいのりをささげ、時には恐れをいなく、そういう思いをいなく人々も現れたようだよ。

ダムだった時代 時代が下って江戸時代の初めのころの1629年（寛永6年）、見沼に大変革がおこったんだ。それは、見沼の出口にほどちかい



ダムだった時代のイメージ

※『見沼のうつりかわり』（前掲）より

ところに大きな堤防がつくられて見沼が大きなダムになったんだ。新しい世の中を豊かにし、財政（ざいせい）の基礎も固めようとしていた幕府は、見沼より下流の地域で新しい水田の開発（新田開発っていうんだ）を進めるために、田んぼで使う水をためるダムに見沼を大改造したんだ。見沼の水だけでは足りない、って考えたんだね。この工事の結果、見沼の水位は数m高くなったようで、見沼のほとりでつくられていた田んぼまで水没しちゃったっていうんだ。


田んぼになった時代 ところがどっこい、見沼にはもっと大きな変革がおこったんだ。それは、ダムになって100年近くたったころのこと。なんと、ダムをやめて、田んぼにすることになったんだ。

みんなは「**享保の改革（きょうほうのかいかく）**」って聞いたことがあるかな。甘くて、みずみずしくて、やわらかいけどぷくっとした食感があって・・・って、それは巨峰（きょほう）でしょ！ぶどうの話じゃないよ！江戸幕府の8代将軍・徳川吉宗（とくがわよしむね）が進めた政治改革をそのころの年号・享保をとって、こう呼んでいるんだよ。この享保の改革の大きな柱の一つが、幕府の財政再建だったんだけど、まずは幕府の収入をふやす、幕府の収入の柱は年貢（ねんぐ）としておさめられるお米、年貢のお米をふやすには田んぼをふやす、ということで、新しく田んぼを造ること、新田開発が進められたんだ。その中で、見沼もダムにしておくのはもったいない、ダムをやめて田んぼにしよう！ということになったんだ。それで、見沼の水をせきとめていたダムの堤防のまん中を掘り崩して、芝川（しばがわ）っていう川を造って、ダムの水をはき出したんだ。でも、新しくできた田んぼや、見沼のダムの水を使っていた下流の田んぼで使う水が必要だから、全長60kmにも及ぶ用水路を新たに造ったんだ。この用水路は、見沼の代わりの用水っていうことで、「見沼代用水（みぬまだいようすい）」って呼ばれたんだ。すごいことをしたもんだねえ。



田んぼになった時代のイメージ
※『見沼のうつりかわり』（前掲）より

●なぜお金が？－のまえに見沼のまつり

船のことや四本竹遺跡から出土したお金のことを忘れてしまうくらい、前段の説明が長くなっちゃったけど、いよいよ本題だよ。このお金が見沼のうつりかわりと、どう関係しているのかっていうと、見沼が沼だった時代がポイントなんだ。この時代、水のめぐみをもたらしてくれる見沼に、時には感謝やいのりをささげ、時には人の力をこえた何かを感じたり、沼の主（こんな感じ？ ) に恐れとうやまいの心をいなく、そういう思いが、やがて神社をまつる信仰とむすびついていったようなんだ。それで、見沼の中で行うおまつりが始まったんだ。

そのおまつりは、見沼のほとり、今の緑区宮本にまつられた氷川女体神社の「御船祭（みふねまつり）」っていうんだ。戦乱や火事、自然災害などの影響もあって、さいたま市の古い時代のことを書き記した記録はあまりのこっていないくて、このおまつりの場合にも、江戸時代より前のことはよくわかっていないんだ。でも、江戸時代に記された記録によると、その頃は1年おきに9月8日に行われていたんだよ。それで、どんなおまつりかって、いうと、見沼の中におまつりを行う場所がきまっていて、氷川女体神社からそこまで行って、見沼の主の龍（りゅう）におみき（神酒）をささげるんだ。そのおまつりの場所では、竹を四本たてて、そこを神聖な場所としていたようだよ。

・・・竹を四本？・・・なんか、にた言葉の組合せを最近きいたような・・・そうだ！



四本竹遺跡のおまつりのあと（ぼつぼつしているところが出土した竹）

※『四本竹遺跡』（埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1992年）の口絵写真を転載

四本竹遺跡だ！・・・って思った君も、思わなかった君も、これでようやくつながったね。そうなんだ、見沼でおまつりをするところが四本竹遺跡なんだよ。

四本竹遺跡では、1989年（平成元年）から1991年（平成3年）にかけて、2回に分けて発掘調査が行われたんだ。その発掘調査では、縄文時代の丸木舟（まるきぶね）も出土したんだけど、なんとなんと！そのおまつりのときに使った竹が泥（どろ）にささったままの形で見つかったんだ。みつかった総数は、竹が抜けたりくさったりしたあともふくめて、790本分もあったんだ。残念ながら、泥より上のところはなくなってしまっていたんだけど、泥にささった長さだけで1m近いものもあったんだ。それから、竹は密集していて、どの竹とどの竹が四本セットになるのかははっきりわからないくらいなんだ。でも、790本分っていうことは、一回のおまつりで四本さしたとすると・・・ $790 \div 4 = 197$ あまり2

すべての竹が残っていたわけではないから、197回とあまりの分1回で、少なくとも198回はおまつりを行った、っていうことが推測（すいそく）できるね。そして、

江戸時代には一年おきにおまつりを行っていたというから、そのルールが変わっていないとすると、単純計算でその2倍・・・ $198 \times 2 = 396$

396年間のおまつりのあと、っていうことになるんだよ！

これは竹と竹のあとが残っていたところから計算した回数や年数だけど、実際にはすでにそういうあとがなくなってしまうところなどもあるので、もっと多かったり長かったりするんだと思うよ。

え？ 「おまつりの歴史やその実際のあとがみつかるのは本当にすごいことだと思うけど、問題のお金や、テーマの船とはどうかかわるの？」、だって？ そこで、いよいよ本題だよ！



四本竹遺跡の竹の断面模式図（だんめんもしきず）

※『四本竹遺跡』（埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1992年）の掲載図を加工

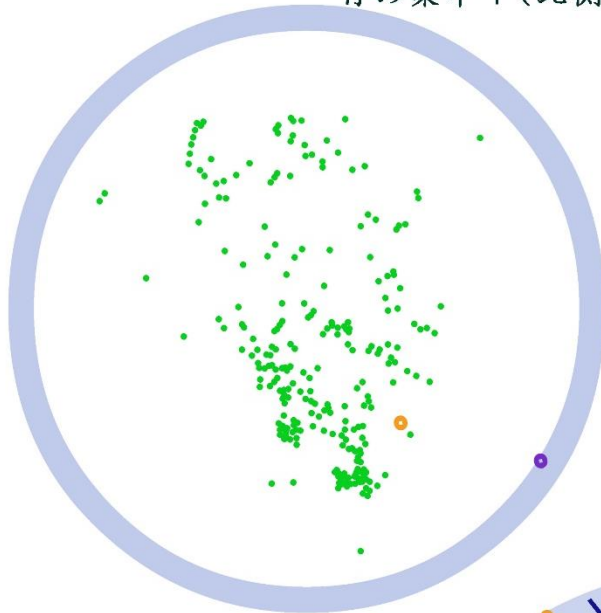
●なぜお金が？

おまつりとお金、っていうと、みんな何か思い浮かぶことはないかな？ 神社やお寺に行くと、「お賽銭箱（さいせんばこ）」っていう箱が置いてあることがあるよ。いのりをささげるときには、「おさいせん」をあげるしきたりや習慣（しゅうかん）があるね。それは神社やお寺の大切な建物の前でのことだけではなくて、見沼の主、見沼の神様のおまつりのときにも同じだったんだ。そう、問題のお金は、四本竹をたてて見沼の中でおまつりを行うときに、「おみき」といっしょにささげたものなんだよ。発掘調査やその事前の調査では、お金が全部で108枚出土したんだ。

・・・「あれ？ 198回分とくらべると、ずいぶんすくないね」、っていう声が聞えて来たよ。そうなんだ。でもこれは、沼のそこにさしてあった竹に比べると、沼に投げ入れたと思われるお金の方が、いろんな事情で動きやすくて、それだけ今日まで残り伝えられてくる割合が少なかった、っていうことが理由の一つだと思うよ。お金が残っていたこと自体、いろんなぐうぜんが重なった結果だったんだね。それともう一つは、推測になるんだけど、はじめのうちは本物のお金を沼に投げ入れるしきたりはなくて、あるときから、お金を投げ入れるようになったんじゃないか、っていうことなんだ。そう考えるのは、竹がみつかったところ全体でお金が出土したわけではなくて、その南側の方にまとまっているからなんだ。

次のページの図は、みつかった竹とお金の位置を重ね合わせた図なんだ。竹がみつかったところが二つのまとまりにわかれていることがわかるね。そして、その南側のまとまりのところで、お金の大半が出土していることもわかるね。見つかったお金は、江戸

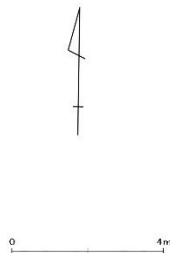
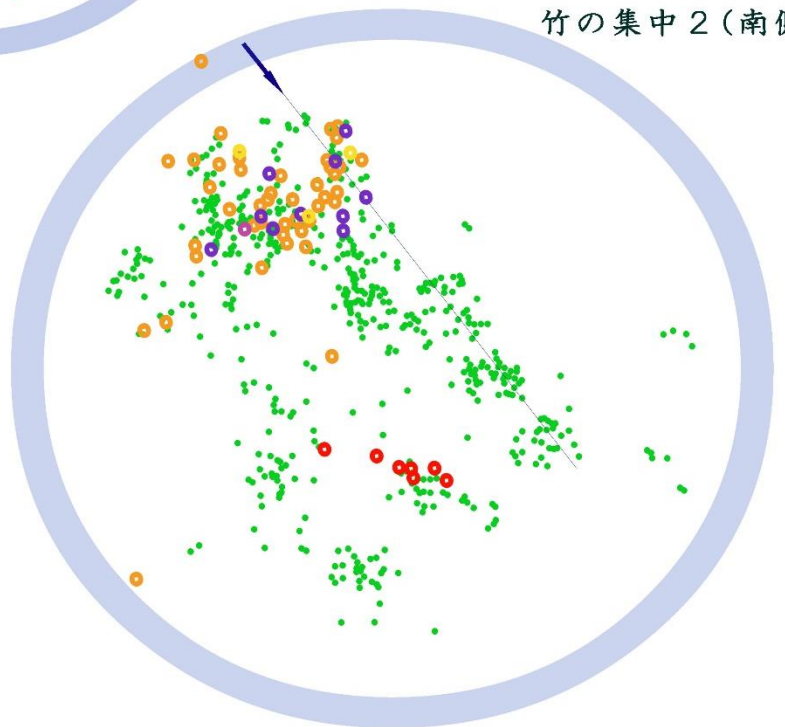
竹の集中 1 (北側)



図の中の記号のせつめい
(凡例 はんれい)

- 竹
- 唐・安南のお金
- 北宋のお金
- 南宋のお金
- 明のお金
- 江戸幕府のお金 (寛永通宝)
- 竹の断面模式図の位置

竹の集中 2 (南側)



四本竹遺跡の竹とお金のひろがり

※『四本竹遺跡』(埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1992年)の掲載図を加工

時代の「寛永通宝(かんえいつうほう)」も含まれているんだ。ある時からお金を投げ入れなくなったのではなくて、おまつりを行う場所が少しずつ移動して行って、そうした中でお金もまくようになった、って考えられるんだよ。

見つかったお金の一覧表をつぎにのせておくね。はるか昔の中国の唐(とう)のお金やベトナムのお金もあって、国際色豊かだね。ただ、これは四本竹遺跡だから、っていうわけではなくて、江戸時代のはじめのころまで日本の社会で流通していたお金の「縮図(しゅくず)」っていうのかな、ふつうのことなんだ。戦国時代でもはるか900年以上前のお金があたりまえのように使われていたんだよ。

見つかったお金の一覧表を次のページにのせておくよ。

四本竹遺跡からみつかったお金

番号	種類	発行者	初鋳年	出土枚数	図の番号	備考
1	開元通宝 かいげんつうほう	唐（中国）	621	4		
2	天福鎮宝 てんぷくちんぼう	前黎（安南）	984	1		安南はベトナム
3	至道元宝 しどうげんぼう	北宋（中国）	995	1		
4	咸平元宝 かんぺいげんぼう	北宋（中国）	998	2		
5	景德元宝 けいとくげんぼう	北宋（中国）	1004	9		
6	祥符元宝 しょうふげんぼう	北宋（中国）	1008	4		
7	祥符通宝 しょうふつうほう	北宋（中国）	1008	3		
8	天聖元宝 てんせいげんぼう	北宋（中国）	1023	9	1	真書と隷書。問題は隷書。
9	皇宋通宝 こうそうつうほう	北宋（中国）	1038	10	2・3	真書と隷書。問題は真書。
10	至和元宝 しわげんぼう	北宋（中国）	1054	1		隷書
11	治平通宝 ちへいつうほう	北宋（中国）	1064	1		
12	熈寧元宝 きねいげんぼう	北宋（中国）	1068	9	4	真書と隷書。問題は隷書。
13	元豊通宝 げんぼうつうほう	北宋（中国）	1078	7	5・6	行書と隷書。問題は行書。
14	元祐通宝 げんゆうつうほう	北宋（中国）	1086	6	7・8	行書と隷書。
15	紹聖元宝 しょうせいげんぼう	北宋（中国）	1094	2		
16	聖宋元宝 せいそうげんぼう	北宋（中国）	1101	3		
17	大観通宝 たいかんつうほう	北宋（中国）	1107	3		
18	咸淳元宝 かんじゅんげんぼう	南宋（中国）	1265	1		
19	洪武通宝 こうぶつうほう	明（中国）	1367	4	9	
20	永楽通宝 えいらくつうほう	明（中国）	1408	9	10・11	
21	宣徳通宝 せんとくつうほう	明（中国）	1433	1		
22	寛永通宝 かんえいつうほう	江戸幕府(日本)	1636	26		

※太字にしたものが、問題に出したお金。「図の番号」のところの数字が、問題の図につけた番号。

※「開元通宝」は、当初は「開通元宝」と読まれましたが、のちに「開元通宝」が正式名称となったため、ここでは「開元通宝」としました。なお、「開元通宝」は唐の280年にわたって鋳造・発行されました。

●船とのかかわり

ここでようやく船の話にこぎ着けたよ。このお金がどうして船と関係するかっていうと、この四本竹遺跡のところまで、神様が乗った神輿を船に乗せてやってきて、その年のおまつりのために立てた四本の竹のところで見沼の主にお神酒やさまざまな供え（そなえ）ものをささげたんだよ。きっと、お米だとかのお供えのものがたくさんあったんだと思うけど、それらはなくなってしまい、船の上からまかれた金属製のお金が沼の水のそこにしずんで、数百年の時をこえて、現在につたえられたんだ。

では、どこから船にのってきたのかっていうと、四本竹遺跡より2.5 kmほど北西のところ、見沼のほとりの高台にある氷川女体神社（ひかわによたいじんじゃ）からなんだ。この神社は、緑区宮本二丁目にあつて、おまつりでお神酒をささげるのに使われた鎌倉時代頃の瓶子（へいし）っていう焼き物（中国から輸入されたもの）や、鎌倉幕府（かまくらばくふ）の執権（しっけん）北条氏（ほうじょうし）が奉納したといわれる太刀（たち）などが伝えられているんだ。さいたま市にもこんなすごいものが伝えられているなんて驚きだね。しかも、おまつりで使われた焼き物と、実際におまつりの場所に立てられた竹、そして船の上からまかれたお金がそろっているなんて、すごいことだよ！

このように、見沼の豊かな水とそこに船でこぎだすことが大切な内容だったので、このおまつりは、「御船祭（みふねまつり）」と呼ばれていたんだ。



見沼を渡って

※『見沼のうつりかわり』（前掲）に加筆

●船とのわかれ、あたらしいまつり

ところが、このおまつりは、その後の見沼のうつりかわりの中で、この場所では行えなくなってしまったんだ。さっき、見沼のうつりかわりを「海だった時代」→「沼だった時代」→「ダムだった時代」→「田んぼになった時代」って説明したけど、「田んぼになった時代」の到来（とうらい）、つまり見沼が田んぼになったことによって、これまでと同じような形ではおまつりをおこなえなくなってしまったんだ。それは江戸時代の中ごろのこと。1720年代から本格化した江戸幕府の新しい政策（せいさく）・改革（かいかく）の中で、見沼のダムを田んぼにつくりかえることになって、四本竹遺跡のところも田んぼにかわり、船も見沼にこぎだせなくなってしまったんだ。1727年（享保12年）の9月に、四本竹遺跡のところでおこなってきたおまつりの場所のかわりを造ることを、神社の神主さんが幕府に相談した記録があるので、この年までは昔ながらのおまつりをおこなったけれど、それが最後になってしまったようなんだよ。このダムから田んぼへの工事とセットで行われた、新しい用水路（ようすいろ）工事も、ちょうど同じ9月の13日から始まった、っていうから、その年の稲の収穫がおわり、見沼の主（ぬし）に豊作（ほうさく）を感謝し、みのりをささげるおまつりをすませてから、工事が始まったのかもしれないね。

見沼が田んぼにかわって、船を使うおまつりはできなくなってしまったんだけど、おまつりをやめてしまうわけにはいかないので、田んぼにつくりかえた土地の中で、神社の境内の前のところにおまつりをする場所がつくられることになったんだ。まわりに池、その中の島に船の形の壇をつくって、そこでおまつりをおこなうようになったんだ。あたしくなったおまつりは、「磐船祭（いわふねまつり）」とよばれて、2年後の1729年（享保14年）から行われるようになったんだ。そして、あたしくつくられ

たおまつりの場所は、見沼の歴史や人々の祈りに関する大切な文化財として、1979年（昭和54）年に市の史跡（しせき）に指定されたんだ。そのころには、まつりのあとも土がくずれたりうまったりしているところがあったので、1982年（昭和57年）に整備事業（せいびじぎょう）がおこなわれて今の形に復元されたんだ。元のかたちを調べるいろんな研究や発掘調査が行われて、その成果を踏まえて、復元されたんだけど、大勢の方に安全にわかりやすく見学していただけるような工夫もされているよ。

■緑区・四本竹遺跡（しほんだけいせき）出土

■平安時代～室町時代（問題に出したお金がつくられた時代）

その7 船のむこうにあやしい木組み。

これなんだ？

次の二つの中からえらんでね！

1. とおる船を監視(かんし)する関所(せきしょ)

ここだけ川のはばがせまくなっている？

2. 水位(水の高さ)を調節する関(せき)

どうやって調節するのかな？



ヒント よく見ると、木組みの先では水面に段差があるよ

答え 2. 水位（水の高さ）を調節する関（せき）

解説

●正解は水の高さの調節のための関

これは、緑区にある国指定史跡（くにしていしせき）の見沼通船堀（みぬまつうせんぼり）の写真なんだ。ふつうの年には年に2回（1日で午前と午後1回ずつ）おこなっている、「閘門開閉実演」（こうもんかいへいじつえん）の様子だよ。門がまえの漢字が四つもならんで、なんだか見ただけで、むずかしくていかめしいねえ。でも、見沼通船堀も「閘門開閉」も、見沼がダムから田んぼにうつりかわったことと深いつながりがあるんだよ。

写真の船のむこうがわに見える木組み、これは水の高さを調節する関（せき）なんだけど、それをむずかしい言葉でいうと「閘門（こうもん）」ってなるんだよ。ここでは、水をせきとめたり、逆に水をながしたりすることで、水の高さを調節しているんだ。どうしてそんなことをするのかっていうと、荷物をつんだ船を安全にとおすためなんだ。どういふことかっていうと・・・・・・・・・・。

●どうして、そしてどうやって、水の高さを調節するの？

芝川（しばがわ）っていう川と、見沼代用水（みぬまだいようすい）っていう水路（すいろう）をむすんで、その間を船がとおれるようにしたのが見沼通船堀なんだ。ところが芝川と見沼代用水との間には、3メートルも高さがちがっていたんだ。見沼代用水が高くて、芝川が低いんだよ。これほど高さの差があると、特に芝川から見沼代用水に向かって船を進めようとしたときに、流れをさかのぼる形になってしまって、安全に船を進

めることができないんだ。それで、見沼通船堀の水の高さを調節して、安全に船を進められる工夫が必要になったんだ。その工夫が、「閘門（こうもん）」なんだよ。

水は高い方から低い方へと流れていくね。だから、水の高さを調節するには、低い方をせきとめて水をためていく必要があるね。でも、そこにはものすごい水の圧力がかかるんだ。だから、その力にまけない強さ、がんじょうさが閘門には必要だったんだ。

それと、強さの一方で、せきとめた水を流して、今度は高い方から低い方へと船を進ませることも必要だね。そのときに、水を流しやすくするには、がんじょうなだけではだめだったんだ。というのは、水の圧力がかかっているところで、水をせきとめたしかけをはずすのは、なみたいていのことではないんだ。水の圧力にまけないじょうぶさと、水の圧力がかかっているところでも、簡単にとりはずせる仕組み。そこが知恵のしぼりどころだったんだね。

そこで使われたのが、木の板を使う方法。長さ330cm、はば（高さ）18cm、あつさ6cmほどの板を順々に積み重ねていくことで、少しずつ水をためていき、水を流すときには、板と板の間にすきまを作ると、そこから水が流れて、上の板を簡単にはずすことができるんだ。この板のことを「角落し（かくおとし）」って呼んでいるんだよ。

さて、それじゃあ、水の高さを調節する仕組みを図や写真を使って紹介するよ。



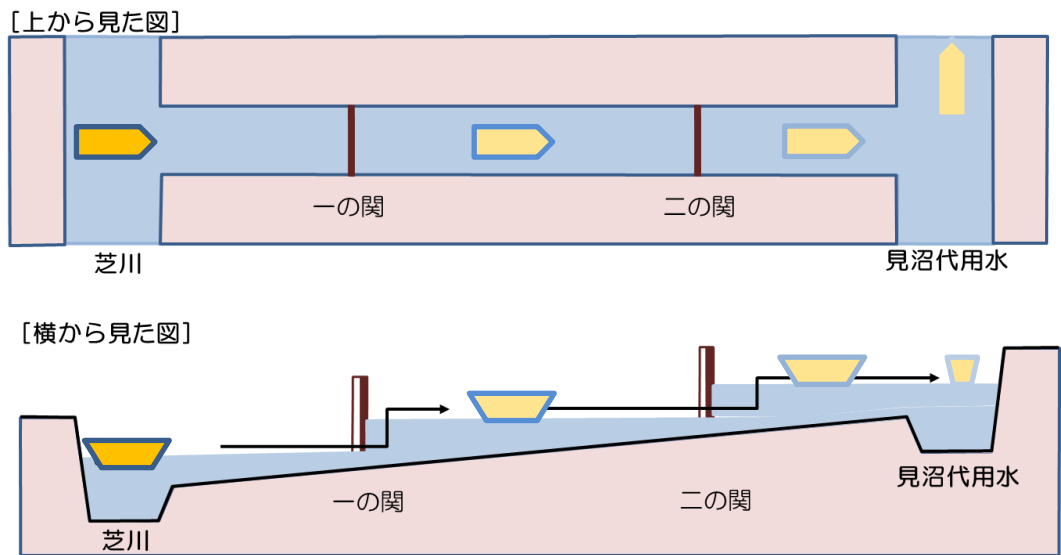
見沼通船堀の全体図

※『見沼を知ろう！』（さいたま市立浦和博物館発行）より

この図は、見沼通船堀の全体図だよ。東に見沼代用水の東縁（ひがしべり）の水路、西に見沼代用水の西縁（にしべり）の水路、そしてその中間に芝川が流れているね。東西の見沼代用水と芝川をつないでいるのが見沼通船堀なんだ。見沼代用水と同じように、芝川の東を見沼通船堀東縁、西を西縁って呼んでいるんだよ。

見沼通船堀東縁・西縁の両方とも、「一の関」「二の関」っていうところがあるのがわかるかな？ どちらも、芝川に近いところを一の関、遠いところを二の関って言っているんだけど、この「関」というのが、閘門のことなんだ。つまり、東西両側にそれぞれ2か所ずつ、閘門が造られて、見沼通船堀の水の高さを調節する仕組みになっていたんだね。

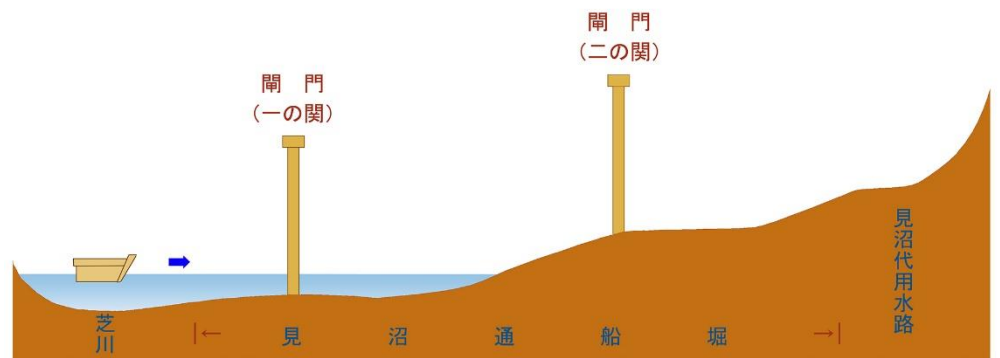
水の高さを調節するかなめが閘門だったんだね。



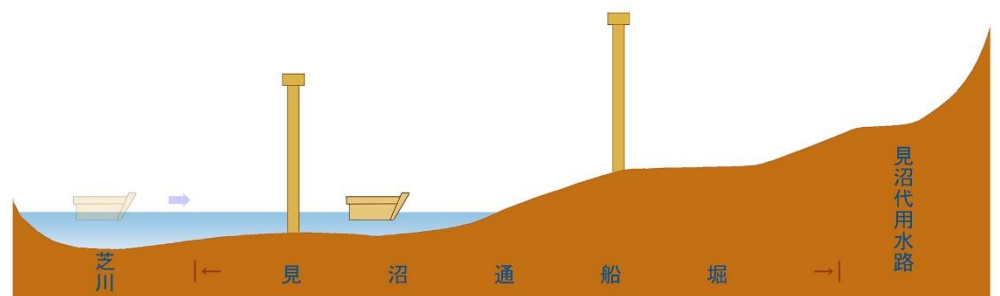
水の高さの調節と船の動き

この図は、芝川を進んできた船が見沼通船堀の東縁を通って見沼代用水へと進んで行く様子を表したものだ。黒の矢印のように、左から右へと船が進んで行くんだ。だんだん船の高さが上がっていくのがわかるかな？ ここでは、スタートからゴールまでまとめて図にしてあるんだけど、船の進み方にあわせて、時間順に分解したのが、次の図だよ。

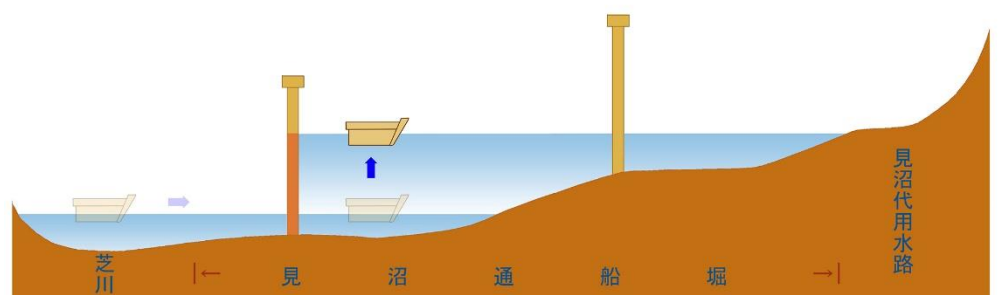
①芝川を進んだ船が見沼通船堀に入る



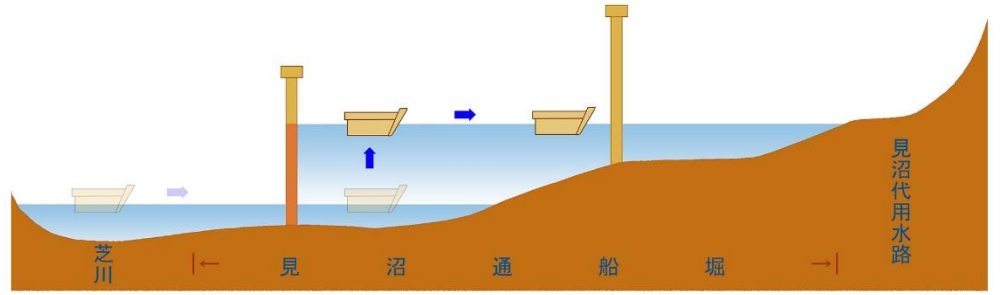
②船が一の関を越える



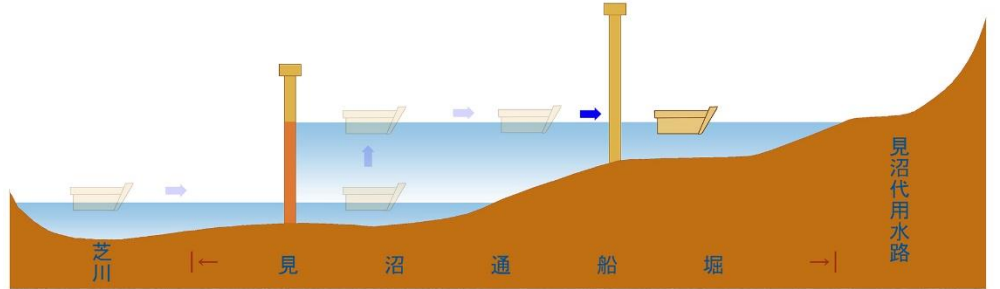
③一の関をしめる。すると水がたまって水位があがり、船の位置も高くなる



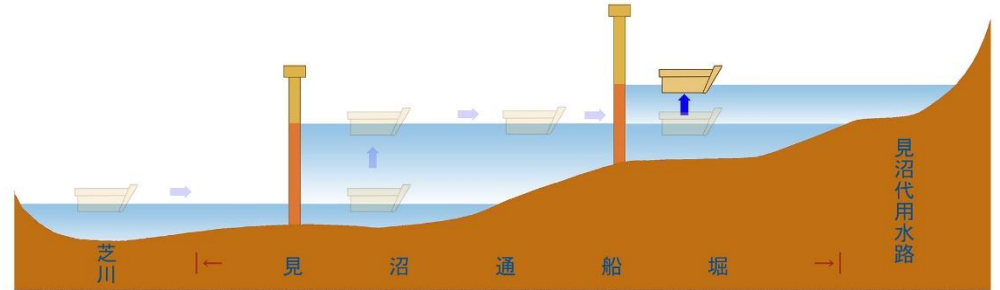
④船が二の関
に向かう



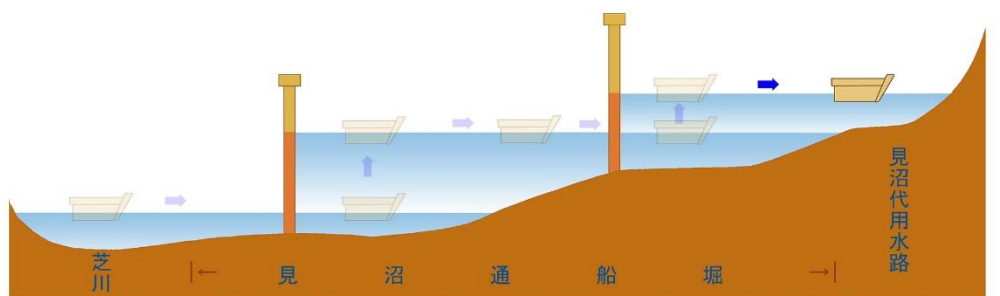
⑤船が二の関
を越える



⑥二の関をし
める。すると
水がたまって
水位があがり、
船の位置も高
くなる



⑦船が見沼代
用水路に入る



こんどは、実際に水の高さが上がっていく様子を見てみよう。①の矢印の先にある数字をくらべてみてね。



上の写真では数字が8まで見えるけど、
右の写真では7までしかみえないね！

ここで使った写真は、毎年8月に見沼通船堀で行っている「閘門開閉実演（こうもんかいへいじつえん）」の様子だよ。一の関をしめて、水の高さが上がっていく様子を再現しているんだ。2のところに水をせき止める板（「角落（かくおとし）」っていうんだよ）を一枚ずつはめていって、少しずつ水の高さを上げていくんだ。上の写真の3のところに棒を持った人がいるんだけど、この人が棒で板を操作して、うまく関のところにはめていくんだ。なお、写真の船は関の方に向かっていて、実際には逆向きに進むんだよ。

令和2年の「閘門開閉実演」は新型コロナウイルス感染症拡大防止のために、残念ながら中止になったんだけど、令和3年からは、感染症拡大防止のための安全対策をしっかりと行った上で、再開する予定なんだ。是非、みんなも見に来てね！

●おまけのはなし

見沼通船堀は、高さの差がある川と水路の間を安全に船をとおすために、工夫がこらされ、その工夫を実現する技術が使われていたことがわかったかな？最後に、おまけのはなしをひとつ。閘門を使って水の高さを調節するだけでは、船がうまく進まないこともあって、陸側からロープで船をひくこともあったようなんだ。こういうのを「曳き船（ひきふね）」っていうんだよ。

右の絵は、江戸時代の終わりに発行された名所の絵（版画）。くねくねまがりながら川が流れていて、そこに船が浮かんでいるね。よくみると、船から線がのびていて、その先には道を歩く人がいるのがわかるかな？これは、船につないだロープを人が引いているんだよ。もっとよ〜く見ると、ロープは船の先に立った棒に結ばれているよ。船に乗っている人は、何やら楽しそうに話していたり、荷物に寄りかかってのんびり気色を見ていたり、ねころがっていたりしているけど、道側の人は肩のあたりで体にロープを巻き付けて、体もななめにかたむけて、重いものを引っ張っていることがわかるね。こういうのを曳き船っていうんだよ。



歌川広重「四ツ木通用水引ふね」
『名所江戸百景』のうち ※ジャパンサーチより

■緑区・国指定史跡 見沼通船堀（くにしていしせき みぬまつうせんぼり）

閘門開閉実演（こうもんかいへいじつえん）のようす

■江戸時代（写真は令和元年の閘門開閉実演）

その8 板と丸太が川を横断。

これなんだ？

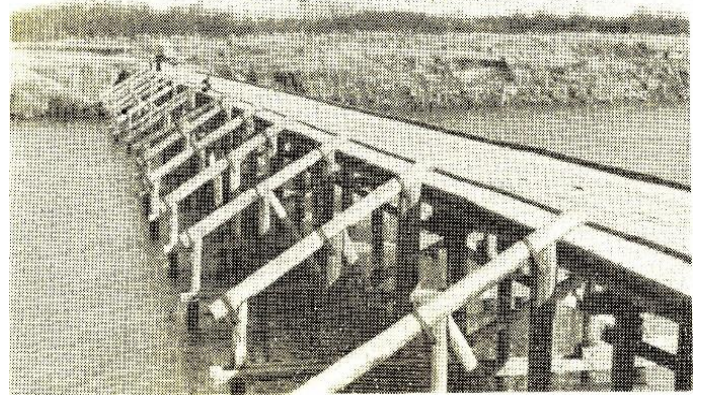
次の二つの中からえらんでね！

1. 水をせきとめるしかけ

見沼通船堀のあとだから
間違いない？

2. 川を渡る橋

てすりがない！



ヒント この川は荒川だよ。

答え 2. 川を渡る橋

解説

●正解は橋

これは、荒川にかけられた羽根倉橋（はねくらばし）、1962年（昭和37年）の写真だよ。川の水が勢いを増したときにももちこたえられるように、いくつかのささえがつけられて、がんじょうに造られているね。

大雨などで川の水が増えたときには、水の中になってしまう、「冠水橋（かんすいばし）」っていうつくりの橋だったんだ。手すりがあると、流れて来た木などがひっかかって、橋をこわしたり、そこから洪水になったりするおそれがあったので、手すりがないんだよ。

羽根倉橋は、昭和13年（1938）に初めてかけられたんだ。それまで橋はなくて、「渡し（わたし）」があったんだ。渡しは、船で川を渡って人や荷物を対岸に運ぶ場所のことだよ。ここの渡しは「羽根倉（の）渡し」って呼ばれていたんだ。

●羽根倉渡しの様子

右の図は、明治時代の後半につくられた地図に描かれた羽根倉渡し



描かれた羽根倉渡し（「埼玉県管内荒川平面図」（第巻七号））
※埼玉県立文書館所蔵

の様子だよ。真ん中を左上から右下に向かって描かれているのが荒川。それを横断して点線が引かれ、その脇には「羽根倉渡船場」という文字が記されているね。「渡船場（とせんば）」っていうのは、さっき説明した「渡し」のこと。よくみると、船の形も描かれているよ。点線が川の岸にぶつかるあたりには、道が来ているね。道（陸上交通）が川にぶつかったところで、道を進んできた人や荷物を川の対岸に渡すのが渡し（渡船場）の役割だったことがわかるね。

それともう一つ、川は道を進む人や荷物の動きにとって面倒な場所、というだけではなかったんだ。それは、川も人や荷物の動きの担い手だったからだよ。さきほどの見沼通船堀や参考に紹介した「四ツ木通用水引ふね」がまさにそうだけど、船を使うことで、人ひとりでは運べない荷物をたくさん運んだりできるようになるね。そして、道が川とぶつかる場所は、川を通して移動してきた人や荷物をいろいろなところに行き届けさせたり、反対に、道を通して移動してきた人や荷物をまとめて運ぶことができるんだね。

だから、渡しがあるようなところは、その近くに川を使って人や荷物の積み込みや荷あげを行う場所がある場合が多いんだ。そういう場所を、「河岸（かし）」っていうんだ。いってみれば、川にある港だね。そして羽根倉渡しのところにも、「羽根倉河岸（はねくらかし）」っていう河岸があったんだよ。

●歴史の中の羽根倉渡し

ところで、羽根倉渡しは、日本史の中でも有名な場所なんだ。どうしてかっていうと、今から670年くらい前に、羽根倉渡しの場所で、激しい戦いがあったからなんだよ。

京都に開かれた室町幕府（むろまちばくふ）という武士の政権を知っているかな？室町幕府は、足利尊氏（たかうじ）と弟の足利直義（あしかがただよし）という兄弟を指導者として、1336年に開かれたんだ。でも、次第に、尊氏を中心とするグループと、直義を中心とするグループができてきて、とうとう戦争をするようになってしまったんだ。

その争いの中で、鎌倉（神奈川県鎌倉市）に拠点を構えた直義を倒すために、尊氏が京都から大軍で関東にやってくることになったんだ。その時、関東にいた尊氏グループの武士たちは、宇都宮（栃木県宇都宮市）で戦略会議を開いて、尊氏の大軍に備える直義グループをはさみうちにする作戦を立てたんだ。この作戦に基づいて、鬼窪（おにくぼ、埼玉県白岡市）から出陣した尊氏グループの武士たちと、それをむかえうつ直義グループとが、この羽根倉で激しく戦ったんだ。この戦いは「羽根倉合戦（はねくらかせん）」と呼ばれているよ。戦いは尊氏グループが勝利して、このあとは直義グループの拠点を次々と攻め破って、尊氏方の勝利を決定づけたんだ。1352年のことだよ。

なぜ、この羽根倉のところで大きな合戦がおこったのか、っていえば、それ以前から、羽根倉は、重要な街道（かいどう）が荒川（当時は「入間川（いるまがわ）」という名前の川だったんだ）を渡る場所だったかららしいんだ。そして、敵の進撃を防ごうとするとき、川を渡る場所は、防御（ぼうぎょ）のかなめになるんだ。それで、重要な街道を進んできた尊氏グループと、それをむかえうつ直義グループとが、羽根倉で激しく戦

ったんだね。

このとき、尊氏グループを率いていた指揮官は、薬師寺公義（やくしじきみよし）という武士。もとは足利尊氏の重臣の高師直（こうのもろなお）という人の家来だったんだけど、高師直が直義たちに滅ぼされたあとは尊氏の家来になっていた人だよ。この人が、戦いに参加した武士たちの手柄（てがら）を確認した古文書（こもんじょ）が残っているよ。その一部の写真は、与野郷土資料館の展示室で見ることができるよ。

羽根倉をとおる街道は、戦国時代になっても重要性は変わっていなかったようなんだ。豊臣秀吉が関東に攻めてきて、会津（福島県会津若松市）まで行って全国統一を完成させたときに、帰り道に通った道がこの道だった可能性が高いんだよ！（第5回の挑戦のときの宿題の解説につけた番外編「天下人・秀吉がやってきた」を読んでみてね！！）。

●おまけのはなし 〈ふなばし〉

川を渡る橋っていうと、みんなは川にしっかりした柱（橋脚 きょうきゃく）を立ててあるものを思い浮かべると思うんだけど、歴史の中の橋は、そういう今の橋とはひと味違った橋もたくさんあったんだ。その一つを紹介するね。

右の絵もさっきと同じように、江戸時代の終わりころに発行された名所の絵（版画）。画面を横切る大きな川に、何やらカーブを描いたものがかかっているね。よくみると、なんと船がいくつもならんでいて、しかも、その上を人が歩いている！

川を渡れるようにする仕組みのことを橋っていうわけだから、この絵に描かれているものも、立派な橋だね。こういう橋のことを「船橋（ふなばし）」っていうんだよ。まさに船をならべてできた橋だから、そのものズバリの名前だね。

柱を立ててかける橋の方が安全でしっかりしているけど、大工事が必要。でもこの橋だと、船と船をしっかりつなぎ合わせる必要はあるけど、柱を立てる橋よりもはるかに簡単に設置できたんだ。難点は、船が川をとおる時には、邪魔になってしまうこと。でも、取り外しも自在だったから、必要なとき以外は外しておけば、船の通行の邪魔にもならなかったようだね。

合戦がしょっちゅうおこっていた時代には、しっかりした橋を造ってしまうと、敵に攻め込まれやすくなるリスクがあったんだ。だから、必要なときだけこの船橋をかける、っていうこともよくあったんだよ。もしかしたら、豊臣秀吉が羽根倉で川を渡るときに



歌川広重「越中富山 船橋」
『六十余州名所図会』のうち
※ジャパンサーチより

もこのような船橋がかけられたかもしれないね。

反対に、1352年の羽根倉合戦の時には、橋はかかっていなかったと思うよ。尊氏グループの進撃を食い止めようとした直義グループの武士たちは、川を渡る船も自分たち側の岸に集めてしまったと思うんだよね。だから、羽根倉渡しまで進んできた尊氏グループの薬師寺公義隊は、馬に乗ったまま川を渡ったんろうね。直義グループから矢でねらいうちされながら、馬に泳がせて川を渡ったんだから、本当に命がけだったんだね。

●おまけのはなし〈羽根倉合戦の古文書（こもんじょ）〉

羽根倉合戦の古文書の写真が与野郷土資料館で展示されていることを紹介したけど、せっかくだから、その古文書の「読み」を紹介しておくね。羽根倉合戦の古文書は、実は二つあるんだ。

その1 高麗経澄軍忠状（町田文書）

高麗彦四郎経澄軍忠の事

- 一、去んぬる年（観応二）八月、鎌倉殿の御教書を下し給わり、下野国宇都宮に馳せ越し、忠節を致しおわんぬ。
 - 一、薬師寺加賀守入道、宇都宮に下向するの間、対面を遂げ、上相民部大輔を誅伐せしむべきの由、条々談合を致しおわんぬ。
 - 一、同十二月十七日、鬼窪において御旗を揚げおわんぬ。
 - 一、同十八日、鬼窪より打ち立ち、符中にまかり向かうのところ、同十九日、羽祢蔵において合戦するの時、難波田九郎三郎以下の凶徒等を打ち捕えおわんぬ。
 - 一、同夜、阿須垣原において陣を取るのところ、御敵吉江新左衛門尉寄せ来るの間、散々合戦を致すのところ、薬師寺中務丞見知せしめおわんぬ。
 - 一、同二十日、符中に押し寄せ、御敵等を追い散らし、小沢城を焼き払いおわんぬ。
 - 一、同二十九日、足柄山において御敵等を追い落としおわんぬ。
 - 一、今年正月一日、伊豆国符に馳せ参り、鎌倉に至り御共つかまつりおわんぬ。
- 右、軍忠の次第、かくの如し。

正平七年正月 日

（薬師寺公義証判）

「承りおわんぬ。（花押）」

なんじゃこりゃあ〜！っていう声が聞こえたような気がするけど、気のせいかな？でも、これじゃ何が書いてあるんだかわからないね。大サービスして、今の言葉で意味を書き直してみると・・・

私、高麗彦四郎経澄が合戦であげた手柄を報告します

- ① 去年（観応2年＝1351）の8月、足利義詮様から下野国（栃木県）の宇都宮に集まるよう、御命令を受けましたので、すぐさま参上しました。
- ② 薬師寺加賀守入道（＝公義）殿が京都から宇都宮においてになったので、直

義グループの関東での中心人物の上杉民部大輔(憲頭・のりあき)を打倒するための作戦を練り上げました。

- ③その年の12月17日、作戦どおり、鬼窪というところで、軍勢を集めて上杉打倒の旗をあげました。
 - ④翌日の18日、集結した軍勢は上杉の拠点の武蔵府中に向かって鬼窪から進撃を始めたのですが、翌日、待ち構えていた上杉方の軍勢と羽根倉(「羽祢蔵」)で合戦となりました。合戦では勝利を収め、敵の難波田九郎三郎などを捕虜にする戦果をあげました。
 - ⑤その晩は阿須垣原というところでキャンプをはりましたが、上杉氏の家来の吉江新左衛門尉の襲撃にあいました。激しい攻防を繰り広げ奮戦したことは、小隊長の薬師寺中務丞殿がご存じです。
 - ⑥20日には武蔵府中への総攻撃を行い、上杉方の守備隊を打ち破り、さらに府中近くに造られた小沢城(川崎市)を焼き払いました。
 - ⑦29日には、尊氏様の襲来に備えて足柄山に陣取っていた直義グループを攻撃して敗走させました。
 - ⑧年が明けて正月一日、尊氏様率いる幕府軍に伊豆国府で合流し、鎌倉への勝利パレードにお供しました。
- 以上、この間に薬師寺殿の指揮下で挙げた私の手柄は、以上です(これを確認して、証明してください)。

※次は、以上とは別の人が書き加えた証明(薬師寺公義)

「確かにここに書かれているとおりです(サイン)」

うーん、これでも難しいね。それでも、いつ、どこで、どんなことをしたのかが、日にち順に書かれているので、「天下分け目」の戦いを背後で支えた武士の動きだってことを考えながら読み直してみると、内容がもう少しわかってくるかもしれないね。

それともう一つ、この合戦に加わった武士の古文書がもう一つ残っているんだ。やはり同じ部隊に属して、羽根倉合戦でも手柄をあげた人なんだ。それも紹介しておくよ。

その2 高麗助綱軍忠状写(彦根藩井伊家文書「高幡高麗文書」)

□麗三郎左衛門尉助綱があげた手柄の数々を報告します

- ① [] □殿宇都宮 [※この部分は文字が失われてしまっています
- ②同じ年の八月十一日に□□□□長四郎兵衛□□□□殿の御命令と、尊氏様御家来の三戸七郎殿の添え状をいただいて、十九日に(宇都宮に)かけつけたところ、一族や近隣の武士たちを味方に引き入れて、義兵を揚げるよう、御命令を受けました。そこで、いったん帰国して、その準備を進めました。
- ③同じ年の(12月)17日に、作戦通りに鬼窪で義兵をあげました。
- ④18日に鬼窪から出陣して武蔵府中に進撃したところ、同じ月の19日に羽根倉で合戦となり、那波多九郎三郎を討ち取りました。
- ⑤その日、阿須書原※でも合戦があり、奮戦しました。 ※→最後に説明します

⑥20日に府中を攻撃し、敵を敗走させ、敵陣を焼き払いました。また小沢城も焼き払いました。

⑦29日には相模国の足柄山の敵を攻撃し、打ち破りました。

⑧今月1日に伊豆国府に参上し、尊氏様のお供をして鎌倉にまいりました。私の手柄は以上です。

正平7年正月 日

※次は、以上とは別の人が書き加えた証明（薬師寺公義）

「確かにここに書かれているとおりです（サインの模写）」

※その1で「阿須垣原」と記されていた地名が、このその2では「阿須書原」と記されているね。これはどうしてかっていうと、江戸時代頃まで、特に地名などの場合には「正しい漢字」があるようではなかったんだ。読み方が同じであれば、いろんな漢字が使われることもざらだったんよ。それに、道路標識などもほとんどない時代。なじみのない土地の地名は、耳で聞いた地名の「音」に漢字を当てはめて書くことも多かったの、なおさら、書く人によって違う漢字があてられやすかったんだ。だから、「阿須垣原」でも「阿須書原」でも、どちらも正しい、っていうことになるんだね。

ところで、この「阿須垣（書）原」はどこかっていうことが、実はよくわからないんだ。一番有力な説は、「あさがや」=阿佐ヶ谷（東京都杉並区）だろうっていう説。でも、阿佐ヶ谷だとすると、羽根倉渡しから今度は一気に南下して、そこから西の府中に向かうルートになる。移動の距離が長くなったり、東西に流れている幾つもの川や谷を越えなければならなくなって、ちょっと不自然なんだ。

ほかに飯能市の「阿須（あす）」っていう説もあるんだけど、そこだと、今度よりもっと西の方に行ってしまうと、うんと遠回りになるんだ。

現在のところ、この「阿須垣（書）原」の場所の決め手がないんだ。ぜひ、みんなも研究してみてね！

二つの古文書を見くらべてみると、少しずつ書き方がちがっていたりして、それぞれの人の個性が現れているね。それに、特に書き出しに近いところは、すでに文字が失われてしまっているところが多いけど、その1よりもその2の方が詳しい情報が書かれているね。

出土品や遺跡からは脱線しちゃったけど、内容をくらべられる古文書が二つ残っているっていうことは、すごいことだね。古文書などを読み解いて、過去におこったできごとをきちんと復元していくことも、広い意味での「考古」の世界だね。さいたま考古マスターをめざすみんなの修行のメニューに加えちゃおうかなあ……。

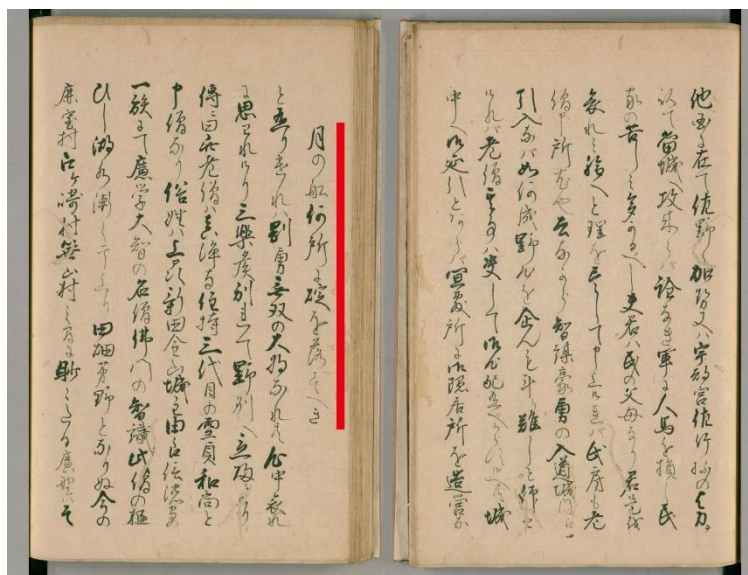
●さらにおまけのはなし〈太田資正の物語と船〉

脱線ついでに、漂流しない程度に、さいたまゆかりの船の物語を一つ、紹介しておこ

う。さいたまゆかりの戦国武将に太田資正（おたすけまさ）っていう人がいたんだけど、みんなは知っているかな。前半生は、室町時代の名門上杉氏の家来として、おとろえゆく上杉氏をなんとか盛り返そうと奮闘したんだ。羽根倉合戦の古文書では敗戦の将として記される難波田氏も戦国時代には上杉氏の重臣になっていて、難波田氏と協力しながら、小田原城の北条氏と戦ったんだ。そして、実家のお兄さんがなくなった後、岩付城（岩槻区）を掌握して、南は東京都足立区から北は鴻巣市・東松山市のあたりにまで領土を広げていったんだ。ところが、北条氏の集中攻撃を受けて敗北、その軍門に下ったんだけど、越後国（新潟県）の上杉謙信が北条氏を攻めて関東にやってくると、それに呼応して北条氏と激しく戦ったんだ。その頃、支城の松山城（吉見町）との緊急連絡に軍用犬を使った智将としても知られているよ。でも、次第に北条氏が優勢になると、岩付城の進む道をめぐって内紛が起こり、結局、息子によって岩付城から追放されてしまったんだ。その後、北関東の親類を転々としたあと、常陸国（茨城県）の大名の佐竹氏に迎えられて、常陸国の北条氏勢力と戦い続けながら、岩付城への復帰を終生願っていたんだ。

この太田資正を重要な登場人物として、江戸時代にさいたま市の周辺でつくられた軍記物語があるんだ。それは、『老談岩槻軍記（ろうだんいわつきぐんき）』っていう物語なんだけど、その中に、太田資正と船にまつわるお話があるんだ。「さいたまの船」に少しばかり関係しているね。

右の写真は、『老談岩槻軍記』の写本の一つ、国立国会図書館の蔵書の中にあるものだよ。この物語の中で資正は、資朝（すけとも）という名前で登場するんだけど、岩付城を追放されたあと、その奪回に執念をもやす資朝がひそかに岩付城近くまで潜入した場面。岩付城近くの黒浜沼（蓮田市）までやってきた資朝は、そこである老僧に出会ったことで岩付城奪回への執着を捨て、静かに隠棲する道を選んだんだ。この物語の最大の山場だよ。



『老談岩槻軍記』巻二

※ジャパンサーチ（国立国会図書館所蔵甲山根岸家本）

赤い線を引いたところに、岩付城奪回を断念した資朝が、黒浜沼の水面に映る月をみてよんだ句が記されているよ。

月の船何所に碇を落すへき（月の船いずこに碇（いかり）を落とすべき）

水面に映った月を船にみだてて、風で水面が揺れるたびにゆらゆらと漂い続ける様子

に自分の姿、境遇を重ね合わせているんだと思うな。執着を捨ててもなお禁じえない、人生をかけた夢を捨てたさびしさ、寂寞（せきばく）。頼りなく揺れ動いて留まるところを知らない水面の「月の船」は資朝なんだね。

おっといけない、注意しなくちゃいけないことがあったんだ。この『老談岩槻軍記』は、江戸時代につくられた、戦国時代を題材にした物語。そこにかかっていることは、本当にあったことではなくて、江戸時代の人作り上げた物語なんだね。とはいってもある程度、事実が投影されているところもあって、実際、岩付城を追放された資正は、城のすぐそばまで潜入したことが、確かな記録に記されているんだ。でも、黒浜沼での岩付城奪回を断念したという筋立ては、明らかに歴史上の事実とは違っているんだ。だから、この句も実際に資正（資朝）がよんだものではないと思うよ。それでも、江戸時代の人作り上げた物語をつくり、時代にほんろうされた武将の心を想像して、こういう句をあてはめた、っていうことは、江戸時代のさいたまの文化を知り、過去のできごとや人に対してどんな思いをいただいていたのかを知る手掛かりとなる、とても大事なことだと思うなあ。

●まだまだ続くおまけのはなし 〈見沼の船の悲劇〉

『老談岩槻軍記』には、さいたまの船に関わるお話がもう少しあるんだ。おまけのおまけで、それも紹介しちゃおう。

上・中・下の3巻の『老談岩槻軍記』の上巻に「吉野原合戦之事」というお話があるんだ。これは「よしのはらかっせんのこと」って読むんだけど、さいたま市北区吉野町であったという合戦のことを描いたところなんだ。でも、ここで紹介するのは、合戦の物語が終わったあとにつけられた、物語の舞台の「今むかし」を紹介するコラムの中のお話。

その1 吉野原合戦は見沼の北のはしの「湖水」をはさんで戦われたというんだけど、その「湖水」はその後ひあがって、深い田んぼになったそう。そこはちょうど、原市宿（はらいちじゅく。上尾市原市）のはずれのあたり。そこには、「船橋（ふなばし）」っていう地名が残っていたんだそう。この地名の由来は、かつてそこには船をつないで橋にした船橋がかかっていたからなんだって。ん？船橋って、どこかで聞いたような……。💡そう、さっき「おまけのはなし」で出て来たね！さっそく船橋のお話がでてきたんだよ。なお、この船橋をわたったところが吉野原だよ。

その2 合戦があった「湖水」は、実は見沼の入り江だったそう。見沼は「坂東一の湖水」（関東地方で一番の湖。なおこれは、物語の作者が書いたことです）、幅10里（約40キロメートル）、たて50里あまり（200キロメートル以上）もの大きさだったそう（これも物語の中でのこと）。物語の舞台から200年近く時をへた1714年7月のこと、慈恩寺（岩槻区）で観音（かんのん）様の開帳（かいちょう。ふだんは拝めない仏像を特別に拝めるようにすること）があつて、そこにお参りに行こうとした人たちが船で見沼を渡ろうとしたんだそう。ところが、船が見沼にこぎ出すと、にわか突風が吹いて大波がおこり、あっという間に船がひっくりかえってしまったそう。

船に乗っていた30人あまりの男女は、気の毒なことに見沼に沈んでしまったそうなの。見沼の新田開発が行われる少し前に起こった悲劇（ひげき）なんだ。

その3 その後、見沼はだんだんひあがって、深い田にかわったんだけど、木崎村・中川村に「四本竹」と呼ばれるところがあって、そこは水の色が緑の小沼なんだそうなの。そこでは毎年6月15日に「龍神祭（りゅうじんさい）」っていうお祭りが行われていて、近くの村人たちが大勢集まって、赤飯をその沼に沈めるんだそうなの。しばらくすると、金色の鯉が2匹湖面におどり出て、赤飯を乗せてあった器を返してよこしたって、言い伝えられているんだそうなの。

・・・「四本竹」っていえば、そう、今回の挑戦で出て来たね。最後の最後でまた「四本竹」が出てくるなんて！でも、挑戦で紹介した「四本竹遺跡」とはちょっと違ったところがあるね。この『老談岩槻軍記』は、江戸時代の終わりのころ、岩槻藩領の人の手で記された物語。伝聞と言いつつ、伝えが入り混じって、もとのお祭りとは違う話になっているかもしれないね。ただ、伝説は伝えられる間に少しずつ変化していくもの。江戸時代の終わりのころに伝説が記録されていた、っていうことは、意味あることだね。

出土品からはじまって、古い写真や古文書、そしてついには物語と伝説にまでこぎ進んできたね。思えば遠くにきたもんだ！でもそろそろ、この長～い「かいせつ」の船旅の帆（ほ）をたたむころあいだね。



- ⑥四本竹遺跡 ⑦見沼通船堀（国指定史跡）
⑧羽根倉橋・渡（羽根倉河岸跡 市指定史跡）

参考：第6回に登場した遺跡

- ①南鴻沼遺跡 ②横根野方遺跡 ③篠山遺跡
④宿宮前遺跡 ⑤根切遺跡

おまけのはなしの舞台（ぶたい）

- 桜区・羽根倉橋（はねくらばし） ※市指定史跡羽根倉河岸跡（はねくらかしあと）
■1962年（昭和37年）